

MAKEN NO DAYDREAMER

魔拳の  
デトリマ 8



NISHI OSYOU  
西和尚

ILLUSTRATION : Tea

# 主な登場人物

## クローナ・C・J・ウェールズ

天才肌のマッドサイエンティスト。  
吸血鬼族で「女楼蜘蛛」の元メンバー。

## ウェスカー

ケルビム族の青年。  
神出鬼没で様々な技を操る。  
敵か味方が不明。

## ザヴァル・ブルーゼン

王族直属護衛騎士団、  
四番隊長。王家への忠誠心が  
厚く、信頼されている。

## メルディアナ・ネストラクタス

ネスティア王国の第一王女。ミナトの実力を  
高く評価する。才能豊かで活発な性格。

## アイリーン・ジェミーナ

冒険者ギルドのギルドマスター。  
伝説の冒険者チーム「女楼蜘蛛」  
の元メンバー。

## ギーナ・シュガーク

王都で訓練中の上級兵。  
徒手空拳で戦う。  
生真面目でとにかく緊張しがち。

## エルク・カークス

成長著しい努力家タイプの  
美少女冒険者。  
ミナトの相棒兼ツッコミ担当。

## ミナト・キャドリユ

本編の主人公。  
異世界に転生して強力な戦闘術を  
身につけた。冒険者として活動中。

## 第一話 狩場に漂う暗雲

王都『ネフリム』にて。

メルディアナ第一王女の提案を受け、僕ことミナトがリーダーを務める冒険者チーム『邪香猫』は、メンバーのスキルアップのため、士官学校への『体験入学』に参加した。

一日目、二日目と様々なカリキュラムをこなし、抜き打ちで発生した『隠密戦闘訓練』もどうにか切り抜けた僕らは、いよいよ最終日、合宿三日目に突入していた。

……はずなんだけど。

なぜか僕らはみんなそろって……しかもメルディアナ王女を含む、昨日はいなかったメンバーも加え、馬に乗って王都郊外の荒野を疾駆していた。

……ああ、うん。ちゃんと説明するから、ちょっと待ってね？

ことの始まりは今朝、さあ三日目のカリキュラムが始まるぞ、つていう時になって、突如として届けられた『内容変更のお知らせ』である。



本来の予定だと、今日は一日使って実戦主体の戦闘訓練になるはずだった。だけどそれが、僕らの班限定で変更されたというのだ。

理由は、『班員の大量離脱により通常カリキュラムの履行が困難になったため』。

……っておい、その原因はあの第一王女様だろ。

あの人が僕らの班に、特殊部隊の隊員を四人も潜り込ませとくからいけないんだ。

四人とも、もう仕事に戻るって出てっちゃったし。

まあ、昨晚あんなだけ暴れといて、今日の授業に平然と出られるわけもないから、仕方ないけど。それで、だ。

変更になって僕らは何をやることになったのかというところ……。

(要人護衛の訓練……って、思いつきり自分の趣味優先だよな、コレ……)

第一王女様エ……。

そんなわけで、『戦闘能力が問題ないことは昨夜の結果からわかっている。なら、状況をより実戦に近づければよからう』という第一王女様の意見によつて、この、『狩猟に行く第一王女様の護衛』という、実戦そのものが決定された。

活発かつ行動的な性格として知られるメルディアナ王女は、どうやら狩りが趣味らしい。

城内でお茶会をしたり、本を持ち寄って読んだりするのが普通の貴族令嬢らしいんだけど、この人は「そんなもんつまらん」と鼻で笑う。

暇を見つけては馬を駆り、近隣の狩猟場で狩りに興じるそうだ。

その際は、貴族の中でもメルディアナ王女と仲の良い狩り友達も一緒に行くことが多い。

……もちろん、それ相応の体力がある人に限られる。

王族と親交を深めようと参加を希望する者は多くいたらしいが……必然的に、不摂生なメタボ貴族や運動神経の欠片も無いヒョロ貴族はアウトなわけだ。

王女様自身は、体力、というか戦闘力がかかなり高い部類に入る。

物好きな性格は小さい頃からだったらしく、勇猛に戦う騎士の姿に憧れて、無理を言つてその訓練に参加していたらしい。

しかも、そんな娘の姿に感心した王様(元騎士)が、面白がつて暇を見つけては訓練をつけた。

その結果、騎士団レベルとは言えないまでも、王族や貴族としては破格のフィジカルを身につけており、身体能力だけなら冒険者ランクでCにも値するらしいから驚きだ。

もちろん、乱暴だとかはしたないとか言つて、快く思わない人もいるらしいけど。

主に、冒険者や軍人を『野蛮人』でひどくくりにするような人とかがうるさいらしい。

礼儀正しく常識人である妹、レナリア王女と比べられ批判されることもしばしばそうだ。

……さて、話が逸れた。

今言つたとおり、その王女様の趣味が『狩り』なわけだけど、もちろん王女様一人で『狩場』なんて危ない場所に行かせてもらえないわけもない。

『狩場』っていうのは、その名の通り、貴族や王族が趣味で狩りを楽しむために魔物を放し、繁殖などで個体数が調整されたエリアである。

とはいえ危険なことに変わりはないため、それなりの腕を持つ護衛を、それなりの数きっちり連れて行くことになる。

当然それは、メルディアナ王女でも同じである。

活発なお姫様を育てたおらかな性格の国王様も、さすがに護衛無しで狩りに行くのを許したりはしない。

それに王女様自身、自分の実力や、王都の外の危険性はきちんと理解していた。

なのでいつもは、きちんと『直属護衛騎士団』を連れて行くらしい。

さて、だいぶ前置きが長くなったけども……その、護衛の騎士団や貴族仲間も一緒に行く『狩り』に、今回僕らも誘われたのだ。

三日目のカリキュラム変更の名目で。

冒険者を同行させるのは初めてだが、騎士団とは異なる戦い方をする者達と狩りに興じるのも面白そうだし、安全面でも貢献してくれそうだから問題ない、とのこと。

もちろん僕らだけに任せるんじゃないかって、ちゃんと『直属護衛騎士団』も同行させるし、隠れて護衛している連中もいるそうだ。忍者？

過保護……では決して無いだろう。仮にも一国の王族が危険区域に出向くんだから。

一番いいのは『行かない』ことなんだろうけどね。

ま、元も子もないけど。

☆☆☆

そんなわけで、今まさにその狩場に向かっているところなんだけど……僕のばかげた身体能力のことを聞いていた王女様が、見てみたいって言ってきた。

馬での移動に飽き始めていた僕は、気分転換と準備運動をかねて自走することに。

かなりの速度で馬に併走し続ける僕を見て、あっけに取られる皆さん。

王女様は、彼らのぼかんとした顔とまだ余裕な僕を見て、愉快そうにしていた。

なお、いつも一緒にいる『邪香猫』メンバーは、新入りのミュウちゃんも含めてほぼ無反応。

この程度はすでに慣れっこなのである。

……っと、言い忘れてた。

今日は、昨日まで別行動だった二人……ザリーとシェリーさんも合流している。

護衛という名目上、人数は多いほうがいいし、『勉強つぼくないならOK！』ってことで、シェリーさんも快くOKしてくれた。

勉強は嫌いだけど、一人でいるのもつまらなかったそう。

……ザリーの存在が無視されている点は、指摘したほうがよかつたんだろうか？  
 そしてさらに、いい経験になるからと、数名の平騎士団員や候補生も一緒についてきている。  
 主に、実力はあるが経験の足りない面々が選ばれたのだそう。

その中には、ギーナちゃんをはじめ、昨日までのカリキュラム中に一緒だった訓練生も何人か含まれていた。

ちなみに、朝早く『集合場所』で再会した時、メルディアナ王女は挨拶もそとりにギーナちゃんに謝罪していた。

『損な役回りをさせることになってすまん』って。

たぶん、というか確実に昨夜の『夜間訓練』のことだろう。

ギーナちゃん、この人の書状のおかげで『裏切り者』にされたわけだし。結構しんどそうだったもんな。

とはいえ、カリキュラムの一環だったことも事実だし、この謝罪をギーナちゃんは恐縮そうに受け入れていた。

なので僕からは、この件についてもう言うことはない。

……せいぜい、時たま、ジト目で見つめるくらいである。

王女様も気付いているようで、ちらっと見返してくる時に、若干気まずそうな、申し訳なさそうにしていた。

僕だって、昨日のアレには色々と思うところはある。

ギーナちゃんの一件を抜きにしても、班員の過半数が離脱した状態にされたり、『敵役』のキャラクターに悪意を感じる部分があったり……特にマリーベル。

まあ、直接抗議するようなつもりはないし、なるべく早く水に流すように努めるので、このくらいは勘弁願いたいところである。

そんなことを考えていると、向こうから話しかけてきた。

「しかし、見れば見るほど、聞けば聞くほどとんでもないな、貴様。本当に人間か？ 獣人族でもない限り、そんなに走れる奴などそうそうおらんぞ？」

「だと思いません。というか、一応いるんですね、知ってる中に」

「まあ、数は少ないがそれなりに……貴様の兄のドレークは馬を余裕で置き去りにしていたし、姉のアクイラは魔法で飛ぶからな。ザヴァル、お前はできるか？」

そう王女様が尋ねたのは、彼女の横……つまり僕の反対側を馬で併走している、渋い顔のオジサマである。

ガチムチに近い筋肉質なボディを軍服に包んでいる。胸のエンブレムは結構豪華で、かなりの高官であることが窺える。

短い白髪と鋭い目、髪と同色の、整えられた口ひげと眉毛が特徴的な、存在感と威圧感バリバリのスーパーなオジサマだった。

ザヴァル・ペルーゼン。

王族直属護衛騎士団、四番隊隊長である。

軍人としてこの国に仕えて半世紀にもなる古老にして、幾多の戦場で敵を打ち倒し、襲撃者から王族を守り、そしてもつとも多く王女様の『狩り』に同行してきた人らしい。

そしてその老練の隊長殿は、王女様からいきなり振られた話にも戸惑うことなく、軽く会釈すると落ち着いて答えた。

「いえ……この老いぼれにはさすがに厳しいというものです、殿下。短時間ならばともかく、このように何分、何十分と走り続けるのは無理かと……軍の中でも、可能な者などごくごく限られてくるでしょう」

「なるほど、やはりか……ならもし軍に入ってくれば、かなりの戦力になるな？」

「私は、鍛錬場での模擬戦や、昨日行われたという『訓練』を見ていないので、断定はできませんが……おそらく是でしょう。ですが、力だけでは渡っていけない世界です。お若いこともありますし、学ぶべきことはやはり多いでしょうな」

「なるほどな。どうだ、入るなら早いほうがいいそうぞ？」

まだ言いますか、あんたは。

人材獲得にとことん貪欲……評価してくれるのはうれしいけど、困ったもんだ。

まあ……真つ向から言ってくれる分、水面下でこそそされるより、わかりやすく助かる。

面倒なだけでなく、イライラするしね、そういうのだと。

もつとも本人曰く、この『真正面から交渉する』っていうのも、僕の性格を分析して考えた作戦らしいんだけど……それ、僕に知らせちゃってよかつたんだろうか。

「おっほん!!」

その時、わざとらしい咳払いが斜め後ろから聞こえた。

んなことしなくても、誰がいるかはわかつてる。

チラッと視線を向けると、そこには馬に乗って……つと、名前なんだっけ？

まあいいや、あのキザ男がいた。数日前の模擬戦で、僕が瞬殺したあいつだ。

英才教育とやらのおかげで、一応体力も技術もそれなりにはあるこいつだが、ギーナちゃん達と違って、訓練生の枠で参加したわけではなかったりする。

実は驚いたことにこいつ、王女様の獵友の一人であるらしい。人格的には問題ありだけど、一応実力はあるということで、よく参加しているそうだ。

王女様も、一応将来有望だから、ということでも許容しているとか。

「殿下、お戯れはおよしくございます。ドレーク総帥の弟君という出自には確かに私も驚かされましたが、だからといって国で要職に就けるわけでもありません」

「？ なぜそう思う、テイラー・リンドル」

あーそうそう、このキザ男、そんな名前だった。

「ドレーク総帥の血縁とはいえ、爵位も何も持たないただの冒険者です。加えてドレーク総帥は、自らの血縁を公務で優遇することは一切無いと明言なさっていました」

ふーん、そうなのか。

まあ、当然っちゃ当然か……うち、兄弟多いし。

血縁で優遇したら、ブルース兄さんに、ノエル姉さんに、ダンテ兄さんにウィル兄さんに……他にも相当な人数がえこひいきされるだろう。

それを防ぐための文言つてわけだ。

なので僕を要職に就けることなんてできない、というキザ男の主張は、正しいといえは正しい。が、王女様は、何だそんなことか、とでも言いたげな目をしていた。

「そんなことは私も知っている。確かに、ドレークの血縁だからという理由で特別扱いすることなど、王女である私にもできん。やろうとしても父上に止められるしな」

「でしょう？ であれば……」

「が……しかし、だ。ドレークは、えこひいきはしないと云っただけで、別に『要職に就く』ということ自体は禁じてはおらんぞ？ 個人の實力で、な」

「はい？」

「今、ザヴァルも言っておつたらう、ミナトには経験が足りんと。しかし裏を返せば、経験をきっちり積みばモノになるといふことだ。そして経験に伴う順当な出世ならば、ドレークの感知すると

ころではない。そもそも私も、最初から要職に就けるつもりなど毛頭ないからな」

「で、では……手順を踏んで、ゆくゆくは彼を騎士団に迎えると？」

「そうしたいのは山々だが、いかんせん本人が首を縦に振らんでな……」

その答えを聞いて、なんかあからさまにホツとしているキザ男。

そして、こつちを見て薄ら笑いを浮かべる。

……また露骨なことだ。

ところで、実は今日コイツは狩りに呼ばれていなかった。

それなのにどうしてここにいるのかというと、またテンプレというか、野心とか下心がむき出しな事情だった。

もともと狩りに行くはずだった貴族の狩り仲間（伯爵家）が、突然都合が悪くなり来られなくなつたという。

急に仕事が入って、家族総出で対応しなきゃいけないなくなつたらしい。もっと偉い貴族からの命令で断れなかつたそうだ。

で……代わりに、同じく狩り仲間（公爵家）であるこのキザ男が来たらしい。

集合場所に来た時に、王女様が不満そうに眉をひそめたことにも気付かず、「今日はお日柄もよく狩り日和だ」だの「都合が悪くなつた彼も忙しいそうだからお気を悪くなさらず」だのくつつちゃべって、空気を悪くしていた。



まあ獵友ではあるし、参加できなくなった貴族の面子<sup>メンツ</sup>つてもものもあるので参加を認めた王女様だけど、やっぱりうっとうしうっとうしそうではある。

「それはそうとミナト・キャドリーユ、もう貴様がとんでもないのはわかったから、馬に乗って来て構わんぞ？」

「わかりました」

許可が下りたので速度を調整し、ザリーの馬と並走する。

そして、ぴよんと馬の背に飛び乗って……そのままザリーの後ろに立った。

直立不動でバランスを取る。

王女様からは面白そうな目を、他の護衛の人達からは、変わり者を見るような目を向けられてるけど、気にしない。

バランス感覚のトレーニングだし。

ちなみに『邪香猫』メンバーは、王宮から貸してもらった馬三頭に分かれていて、他はシェリーさんとエルク、ナナさんとミュウちゃん、という組み合わせで乗っている。

ちなみに僕はザリーの後ろで、さっきまでもこの姿勢だった。

で、ペットのアルバは横を普通に飛んでいます。

「しっかし、揺れる馬上でよく立ってるわね、あんた。座んないの？」

「いや、野郎に抱きつく趣味はないからさ」

「ははは……ごめんねミナト君、色気の無い同乗者で」

「いやいやザリー、助かってるよ。僕は馬乗れないからさ。まあ、僕が手綱<sup>たづな</sup>を握ってエルクに後ろからくっついてもらう、っていう夢シチュエーションができないのは残念だけど」

「あんたねえ……まあ、それは私もちょっと残念だけど」

「お、久々のデレ？」

僕が思わず調子に乗ると、すぐにエルクの突っ込みが飛ぶ。

「うっさい！」

「いーなーエルクちゃん、ミナト君にそんな風に言ってもらえて。ねえミナトくん、女の子との相乗りをご希望なら、ここにもっと無防備な娘がいるんだけどー？」

こちらは相変わらずのシェリーさん。

「逆にこっちが襲われそうだからやめとくー、馬上じゃ逃げ場ないし」

「あーん、いけずう」

そんなおバカな話を繰り返して、通常運転で目的地へ向かっています。

王女様の話だと、目的地につくまであと四十分ってどこか……本でも読もうかな。

王都の書店で買った奴をベルトに収納しといたのは、正解だった。

取り出して、しおりを挟んだところから読み始める。きつと読み終わるころには着くだろう。

すると、ふいにエルクが口を開く。

「……ミナト、あんたさ……馬車みたいに自分が何もしなくていい乗り物に乗ったり、道案内してもらったりすると、自分は何も考えず放つとくタイプよね？」

「んー……確かにそうかも」

まあ、周りに敵がいまいいかとか、案内人が不意に襲ってこないかとか、警戒くらいはするけども。

「でも、いきなりどうして？」

「いや、だから道覚えないんじゃないか……って思ってた」

「……………」

黙って本を閉じましたが何か？

☆☆☆

狩場に到着したのは、予定より十分ほど遅れてのことだった。

天啓を聞いた気がして、一念発起して道覚えてみようとした僕の努力はやっぱりムダだったものの……問題なく到着したそこは、一見すると普通の山。

しかしこの山は王国に代々受け継がれてきた王族専用の狩場であり、専門の機関によって管理されているようだ。

具体的には、Dランク以下の魔物が出現しない。

随所に休憩所が設けられており、定期的に保存食が補給される。

なので騎士団の一隊でも連れて行けば護衛は十分で、守られながら狩りを楽しめる、というわけだ。

王女様も三年前から通っていて、最近物足りなくなってきたらしいんだけど、だからって他では狩りをさせてもらえないので我慢しているとか。

籠の厩舎に馬を預けて、各自で柔軟なんかの準備体操をすることに。

手をぶらぶらと振って動かしながら、王女様が言う。

「まあ、貴様達のような高ランクの冒険者には、ただ退屈なだけかもしれないが……この地域にしかない魔物もいるはずだ。遠足だと思つて楽しんでくれ」

「では、参りましょう」

体操が終わると、先導して歩いていくザヴァルさん。

そのまま僕らも続いて、林間の散歩コースみたいな道に入っていく。

どうやらこの『狩り』というのは、闇雲に山歩きをしながら獲物を探すわけじゃないらしい。

歩きながら、ナナさんに教えてもらった。

この山には、狩猟をするための『順路』なるものがあるらしい。

専門の機関によって整備されている——山道の雰囲気崩さないように、『整備しすぎない』ようにされた道は、この山にいくつかある、魔物が出やすいポイント近くを通っている。

なので、道に沿って山歩きをしながら、ポイントが近づいてくると気を引き締め……何か出てくればそれをしとめる。

出てこなければ少し道から外れて草むらや木立に入り、手ごろな魔物を見つけてしとめる、って感じだそう。

狩りは狩りだけど……なんか、初心者用の魔物討伐訓練みたいな感じもするな。そのポイントが用意されてるあたりとか。

しかも護衛までいるのだから、言ってみれば接待プレーみたいなものだ。

まあ、安全性は高いのかもしれないけど……こりゃ確かに飽きるだろうな。特に、才能ある人は、割と早いうちに。

現に王女様も飽きつつあるらしいし。

☆☆☆

『順路』である林道を、一時間弱ほど歩いた頃。

やはりというか、王女様は『狩り』をそこまで楽しんでいるようには見えなかった。

以前は楽しかったんだろうけど、慣れてみると……かなり地味だつてことに気付いたんだろう。

騎士出身である自分の父親が、この『狩り』を好んでいない理由も、その頃悟つたに違いない。

限りなく百パーセントに近い安全を確保された状況下での『狩り』と、本職の冒険者や騎士がやるような『狩り』……盗賊の摘発や魔物の討伐は大きく違う。

王女様が魔物をしとめるたびにキザ男から上がる、おべんちゃら満歳の歓声も完全に聞き流し状態。その顔からは、微塵の達成感も感じ取れなかった。

しかし、いくら破天荒な王女様でも、自分の立場くらいはわかっている。安全を捨ててまでスリルを追求することが許されない身分だつてことは。

だからこそ、達成感に欠けるだのなんだのつてぶーたれる程度で我慢してるんだらう。

たまに、僕らに「次は貴様がやってみせよ」つて言ってくることもあった。

その時に僕らの思い思いの狩り方（戦い方）を見て、面白そうに、そしてうらやましそうにしてるけど……そこで「自分もやりたい」とは言い出さないのでから、やっぱりこの人は、肝心の部分はちゃんと大人のようにだ。

開始前、普通に歩けば一時間半から二時間弱で一週できる、つて聞いてたから、もうそろそろ半分は過ぎた頃かな……とか思っていた、その時。

「……ん？」

音が聞こえたわけでも、視界の端で何かが動いたわけでもない。

五感という名のセンサーに、反応はなかった。

が……それ以外のとても不確かな部分が、僕の中で警鐘を鳴らしていた。

それ以外に根拠はないもんだから、具体的なことは全くわかんないんだけど……何ていうか、看過できない『寒気』がした。

これは、前にも感じたことがある。

他に根拠がないのに、この感覚を無視したら絶対にとんでもないことになりそう……そんな第六感。

過去に何度かあるんだけど、代表的なのは、幼い頃の修業中。

母さんとの模擬戦の中で……母さんが、前触れもなくとんでもない攻撃を繰り出そうとしてる時に、何回か感じた。

その感覚に従って回避行動を取ったおかげで、直径数十メートルのクレーターを作るようなパンチや、湖を沸騰させるような熱線から逃れられた。

他にも、強敵から強力・厄介な攻撃が飛んできそうな時など……。

そんな経験もあって、僕はこの感覚にそれなりの信頼を置いてるんだけど……今回のコレは、一体何が原因なんだろうか……？

「？ ミナト殿、どうかなさったか？」

僕の様子がおかしいと思っただのか、同じように周囲を警戒していたザヴァルさんが尋ねてきた。

彼は何も気付いてないようだ。

ザヴァルさんの言葉で、他の人達も僕に視線を向けた。

「おや、どうしたのかな、ミナト殿？ トイレにでも行きたくなっ」

「空気を読まん発言は控えろ、テイラー・リンドール」

「……し、失礼しました」

どこのバカが茶化そうとしてびしゃりと言われてたのはともかく……一行の中で何かに気付いてるのはやっぱり僕だけみたいだ。

……いや、訂正。

僕の肩に止まってるこいつだけは違う。

僕の肩をつかむ足の指の力が若干強くなり……眼も首も両方動かして、きよろきよろと周囲を見回しているアルバ。

外敵に対して見せるその仕草を見て、『邪香猫』一同にも緊張が走った。

全自動危険察知マシーンでもあるこいつが、僕よりも反応が遅かった点は少し気になるけど……何が起こってるのかを把握するのが先だ。

何せ今僕らは、絶対に傷つくわけにはいかない護衛対象と一緒にいる。

そして僕らの様子を見て、やはり何かある、と確信したらしい。

静かに、しかしさっきまでとは別物の空気をまとったザヴァルさんの目に、老練の猛将に相応し



い鋭い輝きが宿った。

「……どうか、なさったかな？」

「……はつきりとは言えないんですが、何か妙な気配がします。エルク、アルバ」

「了解」

「びーっ！」

すぐに言いたいことを察してくれた一人と一羽は、すぐさま『サテライト』の用意をする態勢に入った。

最近では、低空飛行でもかなり広範囲を索敵できるまでに成長したアルバの術式が作動し、それにエルクが感覚をリンクさせる。

そこにさらに僕や他のメンバーもリンクして、範囲内の状況を把握すると……。

「……やっぱりか。三人？」

「数える限りで、そうね」

『サテライト』の範囲内に、僕ら一行以外の人間の反応があった。

全部で一、二……やっぱり三人だな。

だけどそれに異を唱えたのは、頼れる元直属護衛騎士団のこの方だった。

「いえ、この配置だと……多分三人じゃありませんね。もつと仲間がいると思われれます」

そう告げたナナさんにエルクが返す。

「反応は三人しかないわよ？」

「範囲外から、さらに来ていいる可能性があります。策敵範囲を広げてください。正確に把握しないと、多方向からの襲撃や波状攻撃を受ける危険性があります」

僕が集中すると、ナナさんの分析通り、『サテライト』の範囲外から新たに二人、何者かの反応があるのがわかった。

ゆっくりと、確実に……真っ直ぐこっちに向かって進んできている。

「了解。アルバ、探知半径を全開にして」

エルクとアルバの連携技である『マジックサテライト』。

範囲内の敵を探知したり、濃密かつ迅速な情報のやり取りをしたりできる魔法なんだけど……この技の『範囲』は、実は『目的』によって有効範囲が変わる。

例えば、ただ単に念話をつなげたいだけなら、その有効範囲はかなり広くなる。

プラスして『視覚共有』しようとする、少し狭まるけど……そこまで大きな差はない。『チャウラ』で海賊船を探す時には、コレを使っただけだ。

しかし、魔物などの生命体を『探知』しようとしたり、細かい地形まできっちり知ろうとする場合は、かなり範囲が狭まってくる。

もつとも、アルバの脳を複数同時に使うとか、その制限を取っ払う方法は色々あるんだけど……今回はそこまでしなくていいかな。

アルバを高く飛ばし、限界まで範囲を広げると……敵はけっこう多いことがわかった。全部で十二人。

統率された動きや、森の中で姿を隠しやすいとはいえかなり高い隠密能力を見るに……それなりの手練れと見ていいだろう。ザリーには負けるけど。

簡潔にそのことを伝えると、ザヴァルさんは眉をぴくつと動かしたものの、取り乱したりはせず、すぐさま周囲の様子を窺った。

「……申し訳ないが、我々には感じ取れんようだ。距離はいかほどかな？」

「一番近いので百五十メートル弱まで来てます。遠い奴で、五百メートル弱かと」

「地形を上手く使い、見つからないように近づいてきていますね。かなり隠密能力の高い集団です……プロでしょう。隠密系のマジックアイテムを使っている可能性もあるかと」

と、ナナさんの補足。

その話を聞いたザヴァルさんは眉をひそめ……さつと手で部下達に指示を出す。

それだけで『騎士団』の面々は、隊長が言わんとすることを察し、配置に就く。

二秒もしないうちに、王女様を守る陣形が見事に完成した。

ギーナちゃんや、キザ男達まではその陣形に守られていない。

そのキザ男達は、事態の急変具合に戸惑っていた。

それを完全に無視して、対照的に微塵も取り乱していない王女様が、毅然とした態度でザヴァル

さんに問う。

「ザヴァル、今日は確かお前達騎士団の他に、私を陰から守る者がいるのではなかったか？」

「はっ、隠密部隊より四名派遣されているはずですが……ミナト殿？」

僕の表情の変化に気付いたザヴァルさんが声をかけてきた。

「この魔法では、そこまで詳しく識別できないんですが……動きからして、それらしいのは策敵範囲内にはいないですね」

「……十二人も不審者だ。それを見逃すとは考えづらいな……やられたか」

眉間にしわを寄せる王女様だけでも、取り乱した様子は依然としてなし。

対応を促すようにザヴァルさんにキツと視線を送ると、ザヴァルさんもそれに応え、力強く頷いていた。

しかし一方で、今のセリフに動揺を隠せない人もいる。

「っ!? お、王都の精鋭部隊が!? だ、大丈夫なのですか。ザ、ザヴァル殿!」

「取り乱すなバカ者、余計に危険を招くだけだ。ザヴァル、この場合どうするのが賢い? 指示をくれ。私は守られやすいように動くぞ」

キザ男をぴしゃりと一喝しつつ、動じずに、『守られる』ということをきっちり考えて指示を仰ぐ王女様。

さすが、今求められることがわかっている。

「ありがとうございます、殿下。通常ならば、一丸いちがんとなって山を抜けるか、部隊を二分し、片方が殿下を守りもう片方が敵を各個撃破していくやり方があります。が……」

するとザヴァルさん、僕らに視線を飛ばしてきた。

……言いたいことは、大体予想がつく。

「ミナト殿……少し頼まれてはくれまいか？ もちろん、報酬ほうしゅうは出す」

「『各個撃破』の役割ですか？」

「そうだ」

通常なら、護衛部隊をふたつに分けて行こう、攻撃と防御の同時進行作戦。

しかし今日は騎士団だけでなく……その他の戦力も一緒にいる。僕ら『邪香猫』や、キザ男とその取り巻き、そしてギーナちゃん達訓練生組が。

こっちに『攻撃役』を任せれば、騎士団は王女様を守る役目に専念できるわけだ。

彼らにとっては、王女様を守ることこそが最優先すべき使命であり、そのためにはこれが最善の手。

決して楽しようとか、危険を押し付けようとかしてるわけじゃない。

暗殺者が相手なら、毒でも何でも使って王女様を殺しに来るだろう。

そんな殺す気全開の攻撃から彼女を守る役目のほうが、むしろ危険度も高いと思われた。

だから彼ら騎士団は違うのだ。

「そ、そうだお前達！ こういう時こそお前達『冒険者』の出番だろう！ きっちり戦って、わ、我々を守りたまえ！」

……この、初めて味わう訓練とは違う『実戦』の空気に恐々としているキザ男とは違う。断じて根本から。全く。

その後、手短に済ませた作戦会議の末……防衛メンバーと攻撃メンバーを次のように設定し、速やかに作戦行動に移った。

#### ◆メルディアナ王女防衛メンバー

直属護衛騎士団一同（副隊長除く）、エルク、アルバ、ミュウ、訓練生一同  
キザ男と仲間達（動かれるとかえって邪魔なので）

#### ◆各個撃破メンバー

ミナト&ギーナ組、シエリー&アイバー組、ザリー&ナナ組（二人一組）

ちなみにアイバーってのは、『直属護衛騎士団』四番隊の副隊長さん。つまりはザヴァルさんの部下だ。

じゃ、敵が十二人なんで、一組あたりノルマ四人って……行きますか。

……にしても……さっきの寒気、こいつらのせいなのかな？

## 第二話 災厄、再来

頭の中に浮かぶ『サテライト』の地図。

そこに示された敵と思しき何者かの位置に、少しずつ僕らは近づいていく。

周囲を警戒しつつも、敵の存在には気付いていない風を装う。

そうして限界まで、大回りに迫る。

僕らの接近を察知した敵さんが、距離を取ろうとしたのか、もしくはさらに王女様に接近しようとしたのか、とにかく動いたタイミングで……。

「ギーナちゃん！ 今！」

「はいー！」

僕らはぐるっと方向転換し、一気にトップスピードで突っ込む。

